

「学習指導案 フォーマットサンプル 利用マニュアル」 について

鈴木 そよ子

はじめに

2022年度から神奈川大学教職課程では、学習指導案関係資料をデータ化し、クラウドサービスのBoxを使って、2年次以上の学生が自由に閲覧並びにダウンロードできるようにした。学習指導案関係資料は3種類。

「学習指導案 フォーマットサンプル」

「学習指導案 フォーマットサンプル 利用マニュアル」

「学習指導案 記入済みサンプル」

本稿で紹介する「学習指導案 フォーマットサンプル」は基本形である。教科によって構成が異なる場合もある。「教科教育法」の授業や教育実習校において、異なるフォーマットでの学習指導案作成を指示された場合も、この基本形で項目ごとの意味や項目相互の関連性を把握しておくとし、その指示された書式にしたがってアレンジができ、指示された形の学習指導案を作成することができる¹。

本稿の目的は、これから学習指導案を作成しようとする学生や、基本を確認したい人々をサポートすることにある。

本稿の構成は、学習指導案関係資料をデータ化した目的の整理、学習指導案と関係資料のスムーズな利用のためのアドバイス、学習指導案作成の際に役立つ視点の提案、学習指導案関係資料から成っている。

I データ化の目的

学習指導案関係資料をデータ化した経緯と意図を以下の4点に分けて説明する。

I-1 新書式の学習指導案サンプルの必要性

本学では、『教職ハンドブック』²の冊子の一部として、昭和期から少しずつ手直しをしながら学習指導案の作成方法の説明や、教科ごとの学習指導案サンプルを掲載してきたが、大幅な変更を余儀なくされ、全面リニューアルに踏み切った。

¹ 学習指導案作成のための情報は、各都道府県や市町村教育委員会のサイトや書籍でも紹介されており、自分の教育実習校での書式を調べる際の参考になる。

² 教育実習に関わる科目の情報や説明会資料と、各教科の学習指導案例が掲載されていた。

2017・18年度に改訂された新しい学習指導要領はすでに2020年度から小学校で、2021年度から中学校で完全実施されており、2022年度からは高等学校1年の教育課程まで実施されている。高等学校ではこの後1学年ずつ実施されていく。これに伴って、新学習指導要領のもとでの評価の観点の書式に対応できる「学習指導案フォーマットサンプル」が必要になった。

I-2 利用対象年次の拡大

「学習指導案 フォーマットサンプル 利用マニュアル」の利用対象者は、2年次生以上とした。『教職ハンドブック』は、現在はデータ化されているが、利用対象者は教育実習事前指導の始まる3年次生以上である。『教職ハンドブック』から学習指導案関係資料を切り離し、利用対象者を拡大することによって、2年次配当の「教科教育法Ⅰ」「教科教育法Ⅱ」で模擬授業のための学習指導案を作る際に利用できるようになることに着目した。さらに、2年次配当の「教育課程論」の授業でも、他の科目と共通の「学習指導案 フォーマットサンプル」を使って説明できるようになる。

I-3 手本になる学習指導案の作成

学生が学習指導案を作成する際の手本として、最新のフォーマットで書かれた学習指導案が必要となった。これまで本学では教育実習で研究授業用に作成した学習指導案を教科別、単元別に分けて、資格教育課程支援室に保管してきた。これらは貴重な資料であり、学習指導案作成の際の参考になるのだが、すべてが手本になるわけではない。2年次前期の時点でその良し悪しを判断するのは難しい。また、紙ベースで保管されており、資格教育課程支援室で見ることになるという限定性も重なっている。2年次生のためには、最新フォーマットにもとづく説明と記入済みの手本が必要となった。

I-4 「いつでも、どこでも見られる手本を」という学生からの要望

自宅で学生が学習指導案を書こうとするときに、デジタル化した学習指導案の書き方マニュアルや手本となるサンプルがほしいという要望が、4年次生からあがった。教育実習の経験を経て、これまでを振り返ってみたとき、2年次からの学習指導案作成に際しての不便さが強く印象に残っており、後輩たちのために改善したいという思いだった。

この要望を叶えるには、彼ら自身が学習指導案を完成させる必要があった。新たな評価の観点にもとづく書式を用いた学習指導案は始まったばかりであり、4人の学生が自分の教育実習で研究授業用に作成した学習指導案を再検討し、新しい書式のサンプルとして完成させる作業が始まった。検討は、学生4人と筆者で行った。教科専門の力を持つ学生と、書式や全体構成の意味を理解する筆者が、紙ベースの学習指導案や資料を見ながら、学習指導案をスクリーンに写し出し、変更内容をパソコンの画面で入力し、全員で確認しながら作業を進めた。

II 学習指導案と模擬授業がつながっていない現状

例年3年次後期の教育実習事前指導科目「教育実習指導Ⅰ」で、学生が模擬授業を行っている。その模擬授業は学習指導案を作成したうえで行うが、提出される学習指導案を見ると、評価の観点の全種類が1単位時間のなかで何度も評価されていたり、「指導と評価の計画」の段階を理解しないまま「本時の目標」を決めていたり、「指導観」で書いてい

る内容とは関連性の薄い「本時の展開」構成になっていたり、「本時の評価基準」が記載されていないかったりと、学習指導案の全体的な整合性のないものが多い。これらの記述内容の根拠を聞いても定かではない。「教育実習指導Ⅰ」を履修する前の授業で示された「見本」をなぞる形で学習指導案を作成しており、項目の記述内容の根拠がわからないまま真似している学生が多い。

授業の進め方の例として、模擬授業の前に学習指導案を提出し、何のコメントもなく、20分程度の模擬授業を行い、その後、模擬授業を経て、学習指導案を修正し、再度提出して終わる場合を想定しよう。50分の模擬授業ではないので、修正しても模擬授業をした時間帯の部分に少し手を入れて、学習指導案の修正は終わり、再提出する。模擬授業の評価では、あくまで目の前で展開された模擬授業についてのコメントが行われ、最終的に提出した学習指導案についての指導はない。

このようなケースでは、学生が学習指導案を理解していない場合、学習指導案作成はただの儀式になってしまう。模擬授業での「本時の展開」も具体的な記述が出来ていなければ、修正する内容すらない。授業は授業、学習指導案は学習指導案という、まったく切りはなされた関係に陥ってしまう。

このような状況では、学生は何のために学習指導案を書くのか、何の役に立つものなのか、まったくわからないまま、ただただ書き上げて、提出することになってしまう。「学習指導案フォーマットサンプル 利用マニュアル」は、学習指導案作成と模擬授業を繋げようとする試みでもある。

Ⅲ 学習指導案を作成する意味

学習指導案を作成する価値は、その通りに授業を展開することにあるのではなく、授業準備を入念に行うことによって、生徒たちの発言や反応に柔軟で臨機応変な対応ができることにある。この点を踏まえながら、学習指導案を作成する意味を6つの側面から捉える。

Ⅲ－１ １単位時間の有効な時間配分

有効な時間配分とは、50分という限られた1単位時間をいかに有効に、1つのまとまりのあるものにしていくかということである。生徒が黒板で練習問題を解いている途中でチャイムが鳴って授業時間が終了する、または話の途中で授業が終了する、さらに実験の途中で授業が終了する、このような中途半端な授業の終わり方は、誰もが避けたい。

説明する時間、生徒たち一人ひとりが考える時間、グループ活動をする時間、発表する時間、全体を振り返る時間等を細かく計画し、実際の進行状況によって臨機応変に時間を調整しながら授業を進めなければ、先に挙げたような事態に陥ってしまう。学習指導案の根本には、限られた時間の時間構成のプランとしての役割がある。これは当該教科の1年間のシラバスにもつながる。

Ⅲ－２ 担当クラスの生徒たちにフィットした「本時の目標」設定

「本時の目標」の設定に当たっては、一般的には『学習指導要領』や『学習指導要領解説』の単元目標や、教科書の1項目（ほぼ1単位時間）ごとに明記されている目標や課題を参考にしながら、「教材観」、「生徒観」、「指導観」踏まえて、「指導と評価の計画」を作成し、その中の本時に該当する時間の「ねらい」を「本時の目標」に定めることになる。

これらを頭の中でイメージするだけではなく、文章化して、客観化することで、「本時の目標」の妥当性が見いだせる³。

Ⅲ－３ 「本時の展開」の準備

「指導観」では、「教材観」に示された教材を用いながら、「生徒観」に示された学級把握にもとづき、どのような働きかけをしていくか、生徒たちにどのような変化をもたらしたいかを記述する。これが「指導と評価の計画」に具体化され、さらにその1単位時間である「本時の展開」に具体化される。

これらのことを念頭に置きながら、どの活動に時間をとるのか、どこで生徒たちに考えさせたり、意見発表させたりするのかというアイディアを詰め込んで、削る、詰め込んで、削る。この作業を繰り返すことによって、試行錯誤が紙や画面の上で文字化されるので、「本時の展開」を目に見える形でバージョンアップしていくことができる。

Ⅲ－４ 目標、評価規準、評価基準の整合性

絶対評価の手法を取り入れるようになってから、「評価」のために多くの時間を費やし、より神経を使うようになっている。それは、評価の基準を教師自身が作り、生徒たちのパフォーマンスを教師自身が評価しなければならないからだ。他者が見ても同じ評価になる客観性のある評価基準をルーブリック評価で作成し、自分で評価する。だが、点数で出るものではない活動成果の評価基準を作り出すのも、評価するのも、実は難しい。

学習指導案の項目では、「単元の目標」と「単元の評価規準」、それを具体化した「指導と評価の計画」、これから1単位時間を取り出した「本時の目標」「本時の評価規準」、さらにこれをABCの評価区分で示した「本時の評価基準」が該当する。

学習指導案を作成することによって、授業前にこれらの整合性を見ることができる。

Ⅲ－５ 授業の記録や学習指導案の修正

学習指導案は授業の前に作成するが、実際に授業をした後で、時間配分や展開の方向性、生徒の反応、発言、実験結果などを記録し、修正版を作成しておく、授業記録としての機能も果たし、次の授業の参考にもなる。

Ⅲ－６ 他の先生方との共有

教育実習中の研究授業では必ず学習指導案を作成し、校内の先生方に配付する。また、教員になってから校内や教育委員会単位の研究会で公開授業を行う際にも、学習指導案を作成し、配付する。学習指導案は、自分の授業を他の先生方に公開する際に、指導内容の流れや本時の授業の位置づけや目的をわかってもらった上で、授業を参観してもらうために作成するといってもいいだろう。授業後の検討会にも関わる大切な資料となる。

³ 相対評価を実施していた当時、『学習指導要領』等の教科目標や単元目標に関する記述も内容から導き出されるものだった。これに、「教材観」、「生徒観」、「指導観」を合わせて、「単元の目標」や「本時の目標」が設定されていた。これらも内容理解に関するものだった。「本時の目標」は、わざわざ板書することもなく、指導者としての、自分自身の指導結果に対する評価のような性格を持っていた。

だが、絶対評価の手法が、相対評価に組み込まれるようになって、『学習指導要領』の教科や単元目標がその評価の観点に対応したものになり、「本時の目標」も評価の観点のいずれに対応しているのか、本時ではどの観点を評価するのかの説明が求められるようになり、「本時の目標」は、最初に板書して生徒たちに示し、単元全体の「指導と評価の計画」にもとづく「本時の目標」と「本時の評価規準・評価基準」の設定が必要になった。

さらに、学習指導案は参観者が公開授業で見た教材づくりや授業展開のアイデアを、参観者の授業に活かすことができる1つのツールでもある。参観者が持ち帰って授業をする場合は、授業者も生徒たちも異なるわけだが、そのエッセンスを生かしたよりよい授業づくりのための資料となる。

IV 学習指導案作成と「クッキング・レシピ」

だが、どのような学習指導案でもⅢ－1からⅢ－6に記述したような意味を持つわけではない。「具体的」な学習指導案であって初めてこれらの意味を持つ。「具体的」のイメージを共有するために、一つの提案をしたい。

それは、学習指導案を「クッキング・レシピ」のイメージと重ねて書いてみるという方法だ。誰かのために料理をする場面を仮定して、料理作りと学習指導案作成の作業を重ねてみるとわかりやすい。

IV－1 「教材観」

「教材観」を料理に当てはめると「食材」についての説明に当たる。これから調理する食材の特徴把握と考える。肉の場合、どのような肉なのか、野菜の場合もその特徴や状態について記すことをイメージする。

「教材観」では、単元の内容、既習事項との関連、今後の展開、この単元を選ぶ意義、この単元と生徒の生活や社会、環境との関係など、専門家としての見解を書く。生徒の学習履歴をこの項目で書く場合は、「既習事項との関連」として書くことになるので、その点からのコメントを合わせて書くが必要になる。

IV－2 「生徒観」

「生徒観」を料理に当てはめると「食する人」についての説明に当たる。どのような人を対象にして料理をするのか、幼子なのか、青年なのか、老人なのか、健康な状態か、食欲のない状態かなどの記述をイメージする。

「生徒観」では、①単元に関する生徒たちの既習事項、②生徒の興味・関心・意欲、③学習に関わるクラス全体の傾向や特徴について書く。①の生徒たちの学習歴の把握は、当該学年の当該単元の目標を明確にするためにも欠かせない。過去に遡って教科書を確認するのは大変な作業になってしまうので、『教師用指導書』の記述⁴や、教科書の片隅に書かれている既習内容に関する記述を参考にしながら、すでに学んでいる内容を整理しておく。②③については、その授業者の観察力にもとづく記述となる。

IV－3 「指導観」

「指導観」を料理に当てはめると「料理法」についての説明に当たる。その食材を使って、「食する人」のためにどのような方法で調理するのかをイメージする。

「指導観」では、指導・支援の力点、指導の形態や仮説、その他の配慮事項など、生徒の良さや可能性を生かすような授業方法の工夫や手立てについて書く。当該教材を使って、当該生徒たちにどのような調理法でおいしく精神的な食事をさせたいのか、どのよう

⁴ 例えば、理科と数学については、中学校の『学習指導要領解説』「第1章総説」で、小学校から中学校までの学習系列が図で示されている。

な力がつくことを期待して準備するのがわかるように書く。

IV-4 「本時の展開」

「本時の展開」を料理に当てはめると「クッキング・レシピ」に当たる。「クッキング・レシピ」は、材料の量、火力の強さ、時間、料理器具等、再現可能な要素で成り立っている。「とてもあまくする」ではなく、砂糖大さじ3杯、「5, 6個のじゃがいも」ではなく、400gのじゃがいもと書かれている。材料と手順が示されていることで、料理に不慣れな人でもほぼ目的を達成できるし、再現可能性の高い「具体的」な記述となっている。特に最近のネット情報で得られるシンプルな「クッキング・レシピ」の記述は、何をどうすればいいかがよくわかる。

「本時の展開」は、「過程」「指導内容」「学習活動」「指導上の留意点【評価の観点】」等⁵に分けられた欄に該当する内容を書き込みながら、時間系列で横の欄を揃えて記入していく。「クッキング・レシピ」を意識して書くと、「過程」は時間に当たる。

「指導内容」は箇条書きで指導のポイントをかけばいいことがわかる。文章で書いていると、授業中、ふと確認するときに授業者本人がわかりづらい。

「学習活動」の欄に主語は書かないが、「生徒」を主語にして記述する。だから動詞は能動態となる。受動態や使役の表現にはならない。そして、「…を理解する」という表現を見かけるが、これでは何をしているのかわからない。この文の根拠もわからない。目に見える活動を書く。その際の感覚は、「クッキング・レシピ」が参考になる。

「指導上の留意点【評価の観点】」には、「指導内容」「学習活動」に当てはまらないが授業に必要な内容を記載する。また、【評価の観点】も一文字で記載する。これも、「クッキング・レシピ」でよく見る、使用する調理器具や調理加減の内容に当たる。

「クッキング・レシピ」は、調理人と食材の二者の関係から成り立っており、手順を順番に記載していけばいいが、授業は、教師・生徒・教材の三者から成り立っているため「指導内容」「学習活動」という欄分けが行われていると考えると、学習指導案の形がとても自然に見えてくる。

V データ資料

クラウドサービスのBoxに保存されている資料のうち「学習指導案フォーマットサンプル」「学習指導案フォーマットサンプル 利用マニュアル」を次に挙げる。

⁵ 欄の名称は、さまざまであり、各状況に合わせて名称の意味を読み取って作成することが必要である。

V-1 「学習指導案フォーマットサンプル」

○ ○ 科 学 習 指 導 案

指導教諭 ○○○○ 印

教育実習生 ○○○○ 印

1. 日時・場所 ○年○月○日 () 第○校時 場所

2. 学級 ○年○組 () 人

3. 使用教科書

4. 単元名

5. 単元について

(1) 教材観

(2) 生徒観

(3) 指導観

6. 単元の目標

(1)

(2)

(3)

7. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度

8. 指導と評価の計画 (○時間)

時間	学習内容	ねらい・学習活動	重点	記録	備考

9. 本時の目標

10. 本時の評価基準

評価 の 観点	評価規準	評 価 基 準		
		A 十分満足できる	B おおむね満足できる	C 努力を要する生徒への手だて

11. 本時の展開

過程	指導内容	学習活動	指導上の留意点 【評価の観点】
導入 (○分)			
展開 (○分)			
まとめ (○分)			

V-2 「学習指導案フォーマットサンプル 利用マニュアル」

○ ○ 科 学 習 指 導 案

指導教諭 ○○○○ 印
教育実習生 ○○○○ 印

1. 日時・場所 ○年○月○日（ ）第○校時・場所
 - ① 場所の表記は、2 組合同、理科室などの場合重要になる。
2. 学級 ○年○組（ ）人
 - ② 学級の人数を記さない場合もある。
3. 使用教科書 『○○○○○』出版社名
4. 単元名 第○章・・・・・・・・ 第○節・・・・・・・・
 単元○・・・・・・・・ ○章・・・・・・・・
 Stage○・・・・・・・・ Unit○・・・・・・・・など
 - ① 教科書の単元区分の表記にしたがって書く。
 - ② 「4. 単元名」で「単元」として指定した学習範囲が、この学習指導案で「単元」という言葉を使う際の共通の範囲となる。
5. 単元について
 - (1) 教材観 単元の内容、既習事項との関連、今後の展開、この単元を取りあげる意義、この単元と生徒の生活や社会、環境との関係など、単元についての専門家としての見解を書く。
 - (2) 生徒観 単元に関する既習事項（学習歴）、生徒たちの興味・関心・意欲、学習に関わるクラス全体の傾向や特徴について書く。
 - (3) 指導観 指導・支援の力点、指導の形態や仮説、その他の配慮事項など、生徒たちの良さや可能性を生かすような工夫や手立てについて書く。
6. 単元の目標 (文末表現)
 - (1) 評価基準の「知識・技能」に対応する内容 ……身につける。
 - (2) 評価基準の「思考・判断・表現」に対応する内容 ……表現する。
 - (3) 評価基準の「主体的に学習に取り組む態度」に対応する内容 ……態度を養う。
 - ① 単元内容を指導する前の時点の教師の目標を書く。これから指導する内容に関する目標だから、文末表現は上記のようにする。
 - ② 『学習指導要領』『学習指導要領解説』では、1 年間あるいは小・中・高を通した全体的な学習の流れの中で、当該単元の目標が設定されている。その内容を確認した上で、「5. 単元について」で述べた教材観、生徒観、指導観を踏まえて目標を設定する。同時に、「7. 単元の評価基準」に対応した内容を構成する。
 『学習指導要領』『学習指導要領解説』ともに、図書として購入でき、ダウンロードすることもできる。
 『学習指導要領』
 中学校 https://www.mext.go.jp/content/1413522_002.pdf

高等学校 https://www.mext.go.jp/content/1384661_6_1_3.pdf

『学習指導要領解説』

中学校 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1387016.htm

高等学校 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1407074.htm

7. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
(文末表現) ・・・を身につけている。	(文末表現) ・・・表現している。	(文末表現) ・・・しようとしている。

- ① 「6. 単元の目標」が単元の指導前の時点だったのに対して、「7. 単元の評価規準」は単元の指導が終わった時点の生徒に期待する学習成果や態度を記述するため、文末表現は標記のようになる。
- ② 記述内容は、各教科の『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』を参照する。「6. 単元の目標」と「7. 単元の評価規準」の対応性に留意する。

8. 指導と評価の計画 (○時間)

時間	学習内容	ねらい・学習活動	重点	記録	備考
		★-----	◎		☆----- -----

- ① 「4. 単元名」で指定した学習範囲についての「指導と評価の計画」を書く。
- ② 「8. 指導と評価の計画」は、「9. 本時の目標」「10. 本時の評価基準」を導き出す過程を説明し、「9. 本時の目標」「10. 本時の評価基準」の位置づけと妥当性を説明するもの。
- ③ 本時の欄を太枠で囲む、または、時間の欄に(本時)と書く。
- ④ 各教科の『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』国立教育政策研究所教育課程センター、の書式を参考にして作成する。『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』は図書として購入でき、ダウンロードすることもできる。

<https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryou.html>

- ⑤ 用語説明：指導計画＝時間の配分

評価計画＝評価の配分

指導と評価の計画＝時間の配分＋評価の配分

単元の時間配分を別に記す場合があるが、それは指導計画にあたる。

- ⑥ 「指導と評価の計画」の中に各評価の観点が入るようにする。
- ⑦ 「ねらい」は、1項目でよいが、2項目を設定する場合もある。
「ねらい・学習活動」の最初に当該授業の表題を書いておくとうわかりやすい。
「ねらい・学習活動」は、印をつけて書き分ける。（書き始め：無印と・など）
- ⑧ 「備考」に、評価基準と評価方法を書く。
- ⑨ 「記録」は単元の評価のために、評価の記録をとる授業回を意味する。記録をとる授業回には○をつける。各評価の観点について、1回は○がつくように配置する。

9. 本時の目標

「8. 指導と評価の計画」の「本時」の「★ねらい」と同じ内容を書く。

- ① 8. の②で述べたように、「8. 指導と評価の計画」は「9. 本時の目標」「10. 本時の評価基準」を導き出す過程を説明するために作成するから、「9. 本時の目標」に全く同じ文章を書くことで、「8. 指導と評価の計画」と「9. 本時の目標」の関連性を明確に示すことができる。

10. 本時の評価基準

評価 の 観点	評価基準	評 価 基 準		
		A 十分満足できる	B おおむね満足できる	C 努力を要する生徒への手だて
◎	☆----- -----			

または

10. 本時の評価基準

評価基準	評 価 基 準		
	A 十分満足できる	B おおむね満足できる	C 努力を要する生徒への手だて
☆----- ----- ----- 【◎】			

- ① 評価のために、パフォーマンスを評価ためのルーブリック評価の技法を用いる。
- ② 「評価基準」と「評価基準」が明記されている表を作成する。
- ③ 「◎評価の観点」は、【知】【思】【態】のいずれかで、「8. 指導と評価の計画」の本時の「重点」と同一の項目名を書く。
- ④ 評価基準は「8. 指導と評価の計画」の中の本時の「備考」に書かれている☆評価基準と同じ内容を書く。

- ⑤ 評価の観点を2つ設定している場合は、もう一欄増やす。
- ⑥ A,B の評価基準は、他者も同じ評価ができるように具体的で、授業に即した内容を設定する。
- ⑦ 「C 努力を要する生徒への手だて」としては、B に達していない生徒に対して授業者が行うサポート内容を書く。

1 1. 本時の展開

過程	指導内容	学習活動	指導上の留意点 【評価の観点】
導入 (○分)			
展開 (○分)			【◎】
まとめ (○分)			

- ① 「指導内容」は、本時の授業の骨格となる内容。単語あるいはフレーズで表記しておく、授業中の確認が容易になる。
- ② 「学習活動」は、あえて主語を表記しないが、「生徒が」を主語と考えて能動態で記す。
- ③ 「指導上の留意点」は、「指導内容」「学習活動」には当てはまらないが、授業進行上必要な事柄を書く。たとえば、「ワークシートを配る」、「ホワイトボードを5枚用意する」、「3名程度指名する」、「机間指導をする」、「グループ作業5分」、など。
- ④ 「評価の観点」は、該当の位置に「評価の観点」の項目名の最初の文字【知】【思】【態】を書くだけでよい。評価規準と評価基準の内容は「1 0. 本時の評価基準」でわかる。

(文責・鈴木そよ子)